日本語と中国語における名詞句の等位化可能性[θ]

九州大学　高井岩生　淡江大学　徐佩伶

本発表では、日本語と中国語における NP_1 ト NP_2 という形式を持つ構成素（以下、等位名詞句）は、NP_1 と NP_1 がどちらも同じ意味役割を持っている場合に可能であるということを主張する。

1. 説明対象となる事実

本発表における等位名詞句とは、以下のように２つ以上の名詞句（NP）がトで結び付けられている構成素を指す。

(1)　学生は、それぞれ［図書館から（２冊）と学校から（３冊）］本を借りてきた.

これまでの研究における等位の分析では、等位されている NP はどちらも同じ形態を持つということが前提となっているようである.

(2)　[太郎と花子]は馬鹿だ。　（Kuno 1973：114）
（解釈:太郎は馬鹿だ＆花子は馬鹿だ。）

(3)　太郎が[[花子にりんごを３つ]と[次郎にみかんを２つ]]を買う。（川添 2005：39）

(4)　*太郎が[[花子に]と[リンゴを]]買う。

しかし、形態が同じであれば、いつでも等位が可能であるわけではない。以下の文は、かなり解釈が容易ではない。

(5)　??太郎が オーブンで（２回）と友人宅で（３回）ケーキを焼いた.

また、以下のように異なる形態を持つ名詞句でも等位が可能な場合がある。

(6)　a.　ジョンが　先生に（２回）と母親から（３回）　同じことを言われた.
　　b.　この建物は　地震で（２回）と津波によって（３回）被害を受けている.

本発表では、上の(6)と(5)のような事実を基にして、名詞句の等位を可能にしている統語的条件を明らかにする。

[θ]本研究の一部は住友財団日本関連研究助成（2013-2014）によって行われたものである。

2. 先行研究

なぜ、同じ形態の名詞句だと暗黙的に考えられていたかというと、PF 同一動詞句削除を仮定していたからである。以下削除を仮定していた分析案を簡単に紹介する。

(7) = (3)
太郎が[[花子にりんごを３つ]と[次郎にみかんを２つ]]買う

(8) 削除分析
a. 基底構造
太郎が[花子**に**りんご**を**３つ**買う**]と[次郎**に**みかん**を**２つ**買う**]
b. PF 同一動詞句削除
太郎が[花子**に**りんご~~**を買う**~~]と[次郎**に**みかん**を買う**]

(9) ＝(4) 太郎が[[花子に]と[リンゴを]]買う
a. 基底構造
太郎が[花子**に買う**]と[リンゴ**を買う**]
b. 同一動詞句削除
*太郎が[花子~~**に買う**~~]と[リンゴ**を買う**]

動詞句[NP に買う]と[リンゴを買う]は一致しないため、同一動詞句削除ができない。
ところが、削除分析では説明できない例がある。

(10) [太郎がリンゴを１つ]と[花子がみかんを１つ]（それぞれ）ジョンとメアリーにあげた。
a. (分配的解釈)
太郎がリンゴを１つジョンとメアリーにあげて、花子がみかんを１つジョンとメアリーをあげた。
b. (平行的解釈)
太郎がリンゴを１つジョンにあげて、花子がみかんを１つメアリーにあげた。

(11) 削除分析
a. 基底構造
[太郎がリンゴを１つ**ジョンとメアリーにあげた**]と[花子がみかんを１つ**ジョンとメアリーにあげた**]
b. PF 同一動詞句削除
[太郎がリンゴを１つ~~**ジョンとメアリーにあげた**~~]と[花子がみかんを１つ**ジョンとメアリーにあげた**]

c. LF
[太郎がリンゴを１つジョンとメアリーにあげた]と[花子がみかんを１つジョンとメアリーにあげた]　　（⇒分配的解釈のみ）

動詞句削除の分析では、分配的解釈を出すことができるが、(10b)に示した平行的解釈は出すことができない（川添 2005:53）。また、動詞句削除分析では、sentence-internal 読みを導くことができない（Takano2002）。

(12)　[ジョンがリンゴを１つ]と[ビルがバナナを１本]違う人に買った。
a. sentence-internal 読み
ジョンがリンゴを１つ買ってあげた人と、ビルがバナナを１本買ってあげた人は違う人であった。
b. sentence-external 読み
ジョンが違う人にリンゴを１つ買ってあげた(もともとリンゴを１つ買ってあげた人がいる。この文はその人とは別に、ジョンが異なる人にもう一度リンゴをあげた)。ビルがバナナを１本違う人に買った（状況は前文と同様）

(13) 削除分析
a. 基底構造
[ジョンがリンゴを１つ**違う人に買った**]と[ビルがバナナを１本**違う人に買った**]
b. PF 同一動詞句削除
[ジョンがリンゴを１つ~~**違う人に買った**~~]と[ビルがバナナを１本**違う人に買った**]
c. LF
[ジョンがリンゴを１つ**違う人に買った**]と[ビルがバナナを１本**違う人に買った**]　（⇒sentence-external 読みのみ）

したがって、本稿でも削除分析が妥当ではないことを考える。そこで、[[…NP…]ト[…NP]]のかたちは削除によるのではなく、1 つのまとまりとして基底生成していると考える。

(14)　＝(4) *太郎が[[花子に]と[リンゴを]]買う。

(14)が容認できないのはト等位節の NP は同じ θ 役割を持つ必要があるからである。

3. θ役割の一致

この節では、日本語において、NP ト等位節をなす要素は同じθ役割を持たないといけない事実を挙げる。

(15) a. 太郎は、日本語の先生**から**と友達**に**誕生日プレゼントをもらった。
b. 太郎は、和食**が**２種類と洋食**を**３種類作れる。
c. 太郎は、２人の男**から**と３つの団体**によって**、批判されている。
d. 太郎は、オーブン**で**２回と直火**によって**１回肉に火を入れる。

また、θ役割が異なった等位節の場合は、いずれも容認度が下がる。

(16) a. ??太郎が学校からと自転車で家まで帰った。
b. ??揚げ餅は、米からと油によって作られています。

中国語にも同じような現象が見られる。等位節が繋ぐ要素はいずれも前置詞がつく名詞句であり、一見前置詞がお互いに異なっているが、名詞句に与えるθ役割が同じである。

(17) a. 張三 [**從**老師 {以及/還有/和} **在**同學身上] 學到很多東西.
θ 役割<source>(起点)
b. 張三 [**替**小美 {以及/還有/和} **為**小英] 買了一本辭典.
θ 役割<beneficiary>(受益者)
c. 這件衣服是 [**由**小美{以及/還有/和} **在**小英的店**裡**] 手工縫製的.
θ 役割<Agent>（後件には音声を持たない pro がある）
d. 張三主要 [**以**烤箱 {以及/還有/和} **用**大火] 把火雞煮熟.
θ 役割<instrument>(道具)

(18) θ 役割が異なる例
a. ??張三 [**向**老師 {以及/還有/和} **在**同學身上] 學到很多東西.
θ 役割<source> <goal>
b. ??張三 [**跟**小美 {以及/還有/和} **為**小英] 買了一本辭典.
θ 役割<goal> <beneficiary>
c. ??這件衣服是 [**為**小美{以及/還有/和} **在**小英的店**裡**] 手工縫製的.
θ 役割<beneficiary><Agent>

以上の事実から、[NP ト NP]は統語的に１つの NP になっているということを認めないといけない。また、中国語の場合は前置詞がつくため、全体的に PP になっている。PP であっても、名詞句に与えるθ役割も一致しないといけない。そこで、θ基準を踏まえ、名詞句の等位化に関して(20)の条件を提案する。

(19)　　θ基準

各項は、θ役を１つだけ担い、また、各θ役は、１つの項にのみ付与される。

（Chomsky 1981）

(20)　　θ＆θは、１つのθになる。

(21)　＝(4)　　*太郎が[[花子に]と[リンゴを]]買う。

花子<Goal>、リンゴ[Theme]　　(⇒等位名詞句をなすことができない)

4. 解釈

等位名詞句は１つのまとまりとして生成されると考えると、解釈が問題になる。等位名詞句は、等位的解釈と並行的解釈があるからである。

(22)　＝(10)

[太郎がリンゴを１つ]と[花子がみかんを１つ]（それぞれ）ジョンとメアリーにあげた。

a.　(分配的解釈)

太郎がリンゴを１つジョンとメアリーにあげて、花子がみかんを１つ**ジョンとメアリーをあげた**。

b.　(平行的解釈)

太郎がリンゴを１つ**ジョンにあげて**、花子がみかんを１つ**メアリーにあげた**。

１つの名詞句としてしまうと、分配解釈も平行的解釈が出てこなくなる。そこで、Hoji(1985)に従い、NP ト NP は量化表現であると仮定する。

まず、量化表現に関して、量化表現はスコープ解釈のために、LF において移動（QR : Quantifier Raising）を行う(May 1977)。(23)における例は解釈が二通りある。

(23)　Every man loves some womon

a.　[every man$_x$ [some womon$_y$ [x loves y]]　every>some

（全ての男にとって、それぞれ愛する女がいる）

b.　[some womon$_y$ [every man$_x$ [x loves y]]　some>every

（ある(特定の)女について、全ての男が彼女を愛する）

(24)　論理形式

a.　(23a)　∀x (man)∃y (woman) [x loves y]

b.　(23b)　∃y (woman)　∀x (man) [x loves y]

Hoji (1986)では、「太郎と次郎が本を買った」は「それぞれ」の解釈（分配的解釈）が可能であるのは、等位名詞句が量化詞であると考えれば、説明できる。

(25)　　３人の学生が２冊の本を買った

a.　[３人の学生]$_x$ [２冊の本]$_y$ [x が y を買った]　(分配解釈)

b.　[２冊の本]$_y$ [３人の学生]x [x が y を買った]

(26)　(25a)の論理形式

[学生 a が２冊の本を買った ＆ 学生 b が２冊の本を買った ＆ 学生 c が２冊の本を買った]

(27)　a.　「太郎と次郎が本を買った」

b.　[太郎が本を買った ＆ 次郎が本を買った]

(28)　　**[太郎がリンゴを１つ]と[花子がみかんを１つ]**（それぞれ）**ジョンとメアリー**にあげた。

a.　[太郎がリンゴを１つ]と[花子がみかんを１つ]$_x$[[ジョンとメアリー]$_y$ [x y にあげた]]

b.　[ジョンとメアリー]$_y$ [[太郎がリンゴを１つ]と[花子がみかんを１つ]$_x$ [x y にあげた]]

(29)　解釈

a.　[太郎がリンゴを１つ[ジョンとメアリーに]あげた] ＆ [花子がみかんを１つ[ジョンとメアリーに]あげた]（分配解釈）

b.　[太郎がリンゴを１つ、花子がみかんを１つあげたのは、[ジョンに]だ] ＆[太郎がリンゴを１つ、花子がみかんを１つあげたのは、[メアリー]だ]

(29a)は分配解釈で、(29b)は「太郎がリンゴを１つ、花子がみかんを１つ」が１つのまとまりとしての解釈である。前者ではQRにって生成され、後者は予測とおりの解釈である。[1]

---

[1] (22c)に示したような平行的解釈は、以上のような操作だけでは出てこれない。「並行的解釈」は今回の議論では説明できないが、ここでは特殊な解釈であることを指摘しておきたい。「平行的解釈」の例はほかにもある。

(i)　太郎が__i__日本へ行き、次郎が__j__イギリスへ行ったのはそれぞれ、[船で i と飛行機で j だ]。

5. 結論

本稿では等位名詞句を可能にしている統語条件を見た。つまり、等位名詞句が可能になるのは、等位節をなす要素は同一θ役割を持たなければいけないのである。本稿では扱っていない項名詞と付加詞の組み合わせも今後に議論すべき対象である。

(30) a. *学生がと先生が来た。
b. 学生が３人と先生が来た。

(30)では等位名詞句をなす要素はいずれも<Agent>であり、等位節をなす条件を満たしている。ところが(30a)が許されない。そこで、中国語も似た現象がある。つまり、項名詞の等位節は許されないが、片方が付加詞となると、等位節をなすことができる。

(31) a. *誰還有什麼, 昨天買到了? (θ役割が異なる)
b. 誰還有在哪裡, 昨天買到了全套哈利波特?
c. ??在哪裡還有誰, 昨天買到了全套哈利波特?

日本語の場合は、NP_1が項のときに、許されないのは、等位名詞句の中に埋め込まれているから、1に付いている格が述語によって認可されないからと考えている。認可される格は、述語と直接merge されないといけない(高井 2009)。ところが、(30b)に示したように、３人が付くと、認可できるようになる。また、面白いことに、中国語の場合は日本語と逆で、NP_2が項である場合、容認度が下がる。その違いは日本語と中国語の構造が異なることにあろう。これらの事実を説明できるメカニズムとは何かは今後の課題にしたい。

<参考文献>

Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.

原口庄輔・中村捷 (1992) 『チョムスキー理論辞典』研究社出版

Hoji, Hajime (1985) *Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese,* unpublished Ph.D. dissertation, University of Washington.

川添愛(2005)『動詞・項名詞句の意味合成と文構造』博士論文：九州大学

Kuno, Susumu (1973) *The structure of the Japanese Language.* MIT Press, Cambridge.

May, Robert: 1977, The Grammar of Quantification, unpublished Ph.D. dissertation, MIT.

高井岩生 (2009) 『スコープ解釈と統語論』博士論文：九州大学

Takano, Yuji (2002) “Surprising Constituents.”, Journal of East Asian Linguitics., Vol. 11. pp. 243-301

Takano, Yuji (2003) “Coordination of Verbs and Two Types of Verbal Inflection.”, Linguistic Inquiry, vol. 35, No.1, pp. 168-178

Zhang, Niina N. (2010) *Coordination in Syntax*. Cambridge University Press